

第 19 回 辰野千壽教育賞 講評

令和 8 年度の本賞選考委員会は、20 本の応募論文の中から、最優秀賞 1 編を選出しました。選ばれた実践論文は日ごろの実践に根差した取り組みを中心としながら、その継続性や発展性を十分に期待させるものであり、実践の結果についても単なる印象にとどまらない実証性を含むものでした。

★最優秀賞を受賞された山田一幸（やまだ かずゆき）氏の応募論文のテーマは、「肢体不自由のある児童生徒を対象としたユニバーサルデザインに基づくマイクロスケール実験教材の開発と授業実践―器具・操作・情報提示の再設計を通して、自分で実験できる理科授業を目指して―」です。氏は、特別支援学校に勤務しながら、中学部や高等部の生徒を対象に、複数年間にわたり、ユニバーサルデザインの視点を取り入れたマイクロスケール実験の改善や検証を行ってこられました。

特別支援教育では、「一人一人のニーズに応じて、学習活動に伴う困難さを把握し、指導内容や指導方法を工夫することが求められている」とはいえ、実際には、運動操作の困難さや、筋力の弱さ、不随意運動などの問題が重なり、理科における学習上の課題が指摘されてきたという状況があります。

本来であれば、学習者自身が自らの手で器具を操作しながら、その結果を実地に知り得るという経験が保証されるべきところが、現実的にそうはなっていないという点に山田氏の問題意識があります。また、氏は、理科における観察・実験の価値を単に知るだけでなく、「自ら予想し、操作し、確かめ、考察する過程そのものにある」という信念から、授業実践を①器具の変更、②操作の変更、③情報の整理・見やすさという 3 つの観点で再設計されました。その優れた実践の内容はすでに、多くの学会発表や実践論文として専門領域でも脚光を浴びています。今回提出された内容には、具体的な測定の結果までは示されておりませんが、こうした一連の先行する発表資料集の中で、一つ一つの課題に即した結果が示されていることと思います。また、実践の内容は、今後の研究の発展性を十二分に予測させるものでもあり、多くの選考委員から高い評価を得ることが出来ました。

★以上、受賞者の応募論文内容の一端を紹介申し上げました。山田一幸氏はどちらかと言えば学究的なスタンスから、実践上の工夫という理論と実践を架橋する部分の継続的な研究の一端をお示しいただきました。まだ三十代という若き実践者であると同時に、兵庫教育大学の連合大学院博士課程にも所属しておられる大学院生と伺っておりますが、辰野千壽教育賞の受賞を機会に、ぜひ、実践に磨きをかけられ、奥行きのある研究へと発展されますことを祈念しております。また、一方で、現場に立つ実践者の一人として、教育の現場をリードされますことをお祈り申し上げ、辰野千壽教育賞の講評とさせていただきます。

辰野千壽教育賞選考会議議長